
どうしてこうなった...(機械転生・習作)

習作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしてこうなった…（機械転生・習作）

【Nコード】

N7313Z

【作者名】

習作

【あらすじ】

主人公にとって死んだと思っていたら。

目が覚めたら変な老人に外に出れば近未来的な科学が発達した世界。

主人公「ちょ、まて！この世界はまさか……。そして俺は！？」

気付いた時には頭を抱える他にない、かつての名前を思い出せない部分記憶喪失者。

転生した肉体（？）にも色んな意味で問題が……。

第0面（前書き）

練習作としてこの作品を投稿します。

適当かもしれません。

一話、一話が短いかもしれません。

前作の方も思いだし次第、溜めこみつつ投稿します。

第0面

「・・・っ」

光が閉じた目を照らす。

その眩しさに痛いと思うような錯覚を覚えつつ目をゆっくりと開く。

「・・・？」

見覚えのない場所だ。

研究室の様な場所。

身体を動かそうとしても何かに固定されてるのか動かず。

ガラス越しに見えるそれに自身がポッドのような何かに居ると自覚する。

何かしらの怪我でも負ってここにいるのだろうか？

「目が覚めたようじゃな」

「・・・！」

突然の声に目を向けると白衣姿の老人がいる。

真ん中の部分の頭髮が薄く奇妙な感じがする。

「起動はさせてないはずだが、さて・・・。

まあよい。お前はわしが一番初めに作った戦闘用ロボット。

親の言う事には従うのじゃぞ」

何を言っているんだこの老人は？

俺は人間だ。

碌でもないぐうたらした生き方をしているがだからと言って知らない老人に従う必要は・・・？

俺・・・？

おかしい・・・。

記憶は確かにあるのだが名前が思い出せない。
どうということなんだ？

「・・・名前」

「ある程度、完成すれば名付けてやるわい。
お前はまだまだ未完成じゃからなあ。
じつとしておるのじゃぞ」

老人が去る。

不安が胸中を渦巻く。

名前を思い出せないのもそうだが現状の訳の解からなさに身体が震える。

「・・・あれは」

不安をまぎわらすために周りを見ると鏡が設置されている。
人間の等身を楽々と映し出せる大きさのだ。

そこを覗き込む。

「ちよ、まて！この世界はまさか・・・。そして俺は！？」

この姿に驚愕した。

先ほどの老人も奇妙な感じがしたが何となく覚えがあった。

俺はこれが荒唐無稽な妄想であってほしいと願う。
かつてないほどの現実逃避するのも仕方ないと言っても良いと思えるからだ。

どうしてこうなった・・・。

200X年

人類は新しい【友達】を手に入れた。

人間とロボットが仲良く暮らす、今からそう遠くない未来の事。

世界一の天才科学者トーマス・ライト博士の研究所で、一人のロボットが生まれました。

正義感が強く、誰にでも優しく、思いやりを忘れることのないその少年ロボットは【ロック】と名付けられ、身寄りの無かったライト博士は彼を実の息子のように可愛がりました。

それからしばらくして、ロックを基礎とした高性能なロボットが次々と作られました。

ライト博士の作ったロボットはとても熱心に働き誰からも愛されていました。

それとは変わり。

アルバート・ワイリー博士は心中穏やかではありませんでした。

彼のライバルであるライト博士が何もかも上手くいつているからです。

ワイリー博士も天才ではありませんでしたが一歩及ばず。

いつも彼の研究成果はあまり見向きされずライト博士の方に注目が行ってしまっていたからです。

それらの理由と合わせて古い機械が淘汰される現実には彼はこのまま高性能のロボットの発明が進み過ぎると人間にとってもロボットにとっても良くないと思いました。

物が大事にされてると思えなかったからです。

そのことを政府に掛け合っても無視されました。

ライト博士の名声の高さによる嫉妬と片づけられたのが原因でした。実際は目先の利益にとられ過ぎてる事をワイリーは伝えたかったのがライト博士の名声の高さによって潰されたと思います。

やがて彼はどうしようのない現実にはいつき、遂に世界征服を計画。

ライト博士の作ったロボットと陰で接触し、計画の為に改造をして暗躍します。

改造の際に手に入れたデータを元に計画が失敗した際の次の手として自らが戦闘用ロボットを作り始めます。

ライト博士のカットマンを元にワイリー博士が一番初めに作ったロボットを「メタルマン」と名付けられました。

現在の世界で一番堅いとされるセラミカルチタン製の手投げ式回転ノコギリ・メタルブレードを武器とした純粋な戦闘用ロボット。

彼が目覚める事から物語は始まる・・・。

第1面

次に目が覚めたら身体が動くようになっていた。

丸のこが額に着いた二本のアンテナにフェイスカバー着きのヘルメットに屈強そうなアーマー。

赤が基色のそう・・・メタルマンである。

ロックマン2に出てきた8ボスの一体。

非科学的な事にこのロボットに転生って奴を果たしたらしい。

「まさか子供の頃にやったアレになあ・・・」

思わず愚痴をこぼす。

子供の頃スーパーファミコン時代だったがファミコンも使えるタイプの物を持っていたのでやった事がある。

1～7まで。

メタルマンはライト博士に未来の歯医者さんと馬鹿にされたり、頭が切れている事でロックマンファンには有名なロボットである。

頭がどう切れてるかあまり想像したくないが。

「これでまだ6割しか完成してない状態なのかぁ・・・」

自身の身体の情報電子頭脳が割り出してくれる。

前世の頃は要領が悪過ぎて勉強苦手だったが情報をきちんと理解できるようになってるのは不幸中の幸いだろうか？

とは言え。

「ロックマンと戦う事になる・・・だろうな」

ロックマンの事は嫌いではない。

むしろ好きなロボットでありライト博士やワイリー博士も同様な
だが。

死亡フラグである。

「武器コピーの為に破壊されるのだけは勘弁・・・」

頭を抱える他に無い。

ここから逃げればいいじゃないって？

人権が無く、政府に登録されていないロボットの行きつく場所なんて
スクラップ処理場しかないよ！

特にロボットはまだ新しい分野なので法律関連が穴だらけだし、ま
あだからこそワイリー博士も世界征服でロボットの現実を変えよう
としたんだろうけどね。

ライト博士を叩きのめす意味合いもあるだろうけど・・・。

「・・・今ある物で何とかするしかないか」

手をかざすと手投げ式回転ノコギリであるメタルブレードが出現す
る。

と言う原理でこれが出るのかは全く解からないが電子頭脳のデー

タには両肩部分にセラミカルチタンを生み出す機構があるようである。ここから通じて丸のこの形で精製して出現させるらしい。

これを見るとワイリー博士はやらね役ではあるが間違いなく天才だったんだなあと思える。

ただ才能を活かす方向を間違えただけで。

けどこの世界の在り方に不満を持つのも解からなくては無い。

ロボットが無残に廃棄されていく様を見るとやるせないと言つかなんというか。

電子頭脳があるので生きたまま破壊されていく様を人間で表せば・・解かると思う。

人間とは違うと言われればそれまでだが。

まあどちらにせよこのまま生きて行くならワイリー博士の元から離れられないのでなんとか妥協案を見つけて納得できる形で終わらせるしかないかなとは考えている。

俺は平穩こそが望ましいから。

「むふ、むふふ、フフフフ・・・」

「・・・・・（・・・・またか）」

今現在の居場所はワイリー博士の基地であり現在ロックマン1のエピソードが進行中である。

笑いが止まって無いワイリー博士はライトナンバーズの世界の侵略状況に上機嫌のようだ。

俺は護衛の為にワイリー博士に付き合っている。

他のワイリーナンバーズが目覚めてない。
俺の場合は異様に早かったと言う訳だ。

ちなみに俺の転生に関することは誰にも言っていない。
一笑に付されるかバグの疑いで変な改造させられそうで嫌だから。

E缶を片手にモニターで一緒に様子を見ると・・・。

「む！な、なんじゃあのロボットは!？」

「・・・(来たか!)」

ヘルメットを被り腕をバスターと言うソーラーブリット(太陽光銃弾)を放つ武器に変形させて戦う改造ロボット。

その名はロックマン。

モニターにはカットマンと激戦を繰り広げる様子が見て取れる。
そして打ち勝ち・・・武器のコピーを始めた。

「むううう！あの時のお手伝いロボットか!!」

奴も改造していればこんな事には・・・このワイリー、一生の不覚!
「・・・(無理もないと思うけどなあ・・・)」

ワイリー博士は悔しがっているがロックマンに接触するには当然、
ライト博士の研究所に行かないといけない訳で。

警備が厳重なのが目に見えてるので迂闊な行動は出来ない。

ゆいつつのチャンスは未改造でライトナンバーズの説得に表に出て
きた時だが。

特に何もせずにワイリー博士に油断して貰い見逃す形にしておいた。

死亡フラグ筆頭になぜ何もしないのかと言うとこのままワイリー博士の独裁が始まって必ず歪みが出てくるのが目に見えてるし、人間相手に武器を振るう事に未来でなりかねないから。

ロボットなら平気なのかと聞かれると痛い電子頭脳や心臓部であるエネルギー供給路さえやられなければ修理で治るので気をつければ問題ない。

「じゃがお前の快進撃は続くのかも気になる。

強いようであればわしが引き取り改造してやろう。

むふ、むふふ！」

「・・・とりあえずワイリー博士にはご愁傷さまかな？」

この世界の未来はどうなっていくんだろなあ・・・。

第2面

ロックマンの快進撃は続いた。

エレキマン、アイスマンと経て続けに撃破して行く。

危うい場面は何度もあったがそれを乗り越えて行く様に畏敬の念すら感じる。

親泣かせで碌でなしの俺とは大違いだ・・・。

どうしてこんなに彼は強いのだろうか。

いくら考えても解からない。

彼と接触する事で何か変わるだろうか・・・？

「俺も・・・」

思わず口から漏らしてしまい直ぐに閉ざした。

何を考えているんだろうか俺は。

彼は彼であり俺は俺だ。

それにある意味でこの身体はチートの範疇に入る。

防御力と跳躍力が高めで連射可能でありつつ広範囲に使える武器。

そして前世での知識。

まだ未完成なので跳躍力はそれほど無いが、これだけあるのにこれ以上の待遇を求めるのは強欲が過ぎる。

でも人間の飯が食えないのは残念だし、しかも弱点がまた悲しい事に“自分の武器”だ。

他にはクイックマンの武器が弱点だが努力すればなんとか避けられず！
・うん、速いけど避けれるはず！
そう思わないとやってられん…………。

「ふむ、流石にライトが作っただけあり高性能のようだな…………」

ワイリー博士は口元を手で掻きながらモニターを凝視している。
ライト博士の事を嫌っていても侮らないあたり、この人も只者じゃないんだよなあ。

ほんとこの人なんで冷遇されてたってレベルなんだけど。
この世界の政府の役人とか企業の数々はライト博士に取り入るばかりで目が節穴なのが多いんじゃないかな。

…………割と本当にありそうで困る。
特に後々の続編のロックマンXの世界的に考えると否定できない（汗）。

まあ成長するのが人間だから根が腐る奴は長生きできないでしょ。
それに良い人だっているし。

…………そうであってくれ割と切実に。
人の事は言えないけど願う。

「メタルマンよ。お主ならこのロックマンを相手にどう戦う？」
いけね、考え事をしていたらワイリー博士が話を振って来た。
ちよつと夢中になりすぎたか。

「そうですね…………」

勝つだけならばメタルブレードと投擲術を応用して逃げ場を無くしてしまえばいけると思いますが」

「ほう」

実際、今言ったのは虚言では無い。

完成度6割で跳躍力があまり無い状態だが、ロックマンのバスターはメタルブレードを撃墜出来る訳でもなければ、装甲は平均的と予想出来る為に当たればダメージを与えられるので逃げ場を無くせばいいだろう。

カットマンのローリングカッターがメタルブレードと同じセラミカルチタン製の武器なので弾かれそうだが向こうは連射は出来ないのだからこちらに分がある。

「・・・ならば、“捕獲”する場合なら如何する？」

「・・・ワープを利用して奇襲、バスターの無力化の後に電子錠で自由を奪うか、もしくは罠を張った待ち伏せで罠に掛かる掛からないは別にして多対一に持ち込んで奇襲の時と以下同文と言ったところでしょうか？」

「・・・ちょっと嫌な予感がしてきたな。

捕獲の事を聞きだすと言う事は・・・。

「メタルマンよ。今直ぐロックマンと戦い捕獲しろ。

無理ならばデータを取った後に破壊で構わん」

うわあああああ！？

やばいやばいやばい！！

ここで俺がロックマンと接触したら・・・いや、捕獲とか破壊したらワイリー博士の独裁始まっちゃう！！

どうしよう・・・。

「じゃがお前が危険な状態に陥ったならば撤退も許す。
・・・まだ、未完成じゃからな」

逃げ道はあるけど不味いな。

ロックマンは戦闘経験が浅い状態で武器はバスター合わせて4種、
対する俺は一応訓練しているが戦闘経験皆無。

でも性能はこちらが高いので無難にいけば勝てるだろうが勝っても
不味い。

引くことはモニターされてるから危なくなるまで無理な上に手抜き
はばれると事が厄介に。

負ければスクラップ・・・。

これナンテ理不尽ゲー？

「ゆけいメタルマン！

ワイリーナンバーズの力をこのわしに示すのじゃ！！」

「・・・了解しました」

あゝ、鬱だ。

頭が痛くなってきた。

本当にどうしよう・・・。

第3面

「そこだ！」

熱いマグマが流れる廃棄物処理場。

火そのものの様に纏った小型ロボットのチャンキーとそれを生産するチャンキーメーカーを破壊しながら進む。

何故こんな事になったのかは解かっている。

ワイリー博士が僕の兄弟達を改造して何かを企んでいるからだ。

僕の兄弟を機能停止させて調べる事で解かった……。

前に合った時はそんな素振りは見えなかったと言っのに。

総員第一戦闘配備！ロッキマンが侵入！繰り返す！総員第一種戦闘配備！ロッキマンが侵入！

「邪魔をしないでくれ！」

警報と共に暴走しながらも統制を取る作業用ロボットが行く手を阻む為に次々と出てくる。

彼らを撃つ度にバスターに熱が籠もる……。

ほんとに何だっってワイリー博士はこんな事をしたんだ！

「ロックマンがマグマの通路を抜けたらチャンスだな・・・」

ワープする為の装置の上で空間にロックマンの様子をモニターで見
る。

右手に出したメタルブレードを高速回転させながらワープ地点を定
め隙を窺う。

ちなみに正体が割れないように厚めの大きい布を纏って全身を隠し
た状態だ。

「・・・ふう（正直、気が乗らない・・・）」

溜息を吐く。

ワイリー博士の命令の拒否は現時点では出来ない。

やっている事が犯罪なので気が引ける。

しかし、ワイリー博士の訴えは全体的に見てみれば必要だと思える。

後に目的と手段が入れ替わってしまい、狂ったらしいが・・・。

出来る事ならワイリー博士を止めて平穏に暮らしたい。

だけど止めれば弊害が出そうな上にロボット頼りの今の人類だとあ
まり真剣に受け止めないだろうな。

「いくか・・・」

鬱になりそうだが精一杯の事はやろうと思う。

死んでもう一度、生きる機会があったのだから前とは違って真剣に考えていこうと思う。

悪い未来を想像して止める方法を考えるばかりでなく、現状の把握をしてからでも遅くは無い。

そして、装置が起動した。

「・・・！（貰った！）」
「・・・っ！？」

ワープされた瞬間にメタルブレードを投擲する。
不意を打たれたロックマンは反応に遅れたが気付き、バスターに変形した腕を守る為に片腕をガードにまわして犠牲となり飛んで行った。

カラン、コロン・・・

転がっていく片腕。

切断された腕から部品が見え火花が散っている。

「ぐ・・・！」

ロックマンはバスターを布が巻かれたロボットに向ける。
しかしその顔色は人間のように青く悪いように見える。

「・・・」

こちらは何も言わずに身構えるのみ。
慢心だけはしない。

逆境から逆転するのもロックマンの強さなのが解かっているから。

「君は・・・誰なんだ！」

「・・・！」

「なっ！くう・・・」

返答には答えない。

代わりにメタルブレードをスナップを利かせて一回投げる。

ロックマンは問うても無駄な事を把握したのか驚きながらも回避に
専念して機会を伺っている。

・・・反撃の機会をだ。

しかしそれを許せばこちらが危険なのが目に見えている。
だから・・・

「っ！（相手の武器は連射出来るのか！）」
「・・・」

三回連続で投擲する。

一つはロックマンの頭上にもう一つは左に最後に右へ。

そして俺は・・・

「・・・！突っ込んでくる！？」

ラグビーのタックルの要領で右肩を前に出してダッシュする。
このまま取り押さえれば御の字。

「ロックバスター！」

ロックマンも瞬時の事とは言え待つてはいない。
止める為にバスターを連射する。

しかしあまり効いてないので無視して突っ込む。

「く、ローリングカッター！」

「・・・！！」

あと少しの所で武器を変えてきた。
アレを喰らうのは不味い。

布が切れて正体が晒されるのもあるが何よりも“セラミカルチタン製の武器”は不味い。
優秀な装甲でも持たない。

「・・・（よし、これで！）」

ロックマンがしめたと言わんばかりに距離を取ろうとした時。

「・・・（ニヤ）」

「・・・え！？・・・そんな」

術中に陥った。

笑みを浮かべた俺はそのまま投擲準備完了したメタルブレードでバスターを狙う。

最初に投擲したメタルブレードがロックマンの背後を襲った。

初撃のメタルブレードはバックスピンを掛けて投擲したので地面を走って戻ってくる。

ダメージを受け態勢を崩した今こそが俺の勝機！

「・・・（けど・・・）」

このまま無力化してしまっているのだろうか？

一秒にも満たない間で迷ったが・・・。

「・・・（捕獲した後でこっそりと脱出させれば何とかかな）」

瞬時に判断を下して投擲しようとしたその時。

「・・・！うおっ！？」

「・・・！な、なんだ！！」

投擲を中断して緊急回避行動に移った。

そうしなければ何者かが放ったバスターの直撃を受けてこちらが隙を晒す事になったからだ。

ロックマンも予期していなかったように驚いている。

「く・・・！」

直ぐに身を隠して何者がいるのかを探る。

このまま戦っても危険。

正体を掴んでから撤退しよう考える。

「・・・（こちらにはありがたい形になったな）」

内心、ほつとした。

あのまま捕獲して連れていくことにならなくて。

脱走させればいいと思っただが自身がやったと気付かされずにそこま
で器用にやれるか不安であつたからだ。

しかし誰がバスターを撃つたのだろうか？

と、思ってたら！？

「ローリングカッター！」

「・・・！」

ロックマンが居る所と別の方向からハサミが飛んで来た！

え、まさか・・・。

「ロックにこれ以上の手出しはさせないぜ！」

「カットマン！！！」

また新たな介入者・・・てか、カットマンを直したのか。

まあライト博士もゲームの様にただ待っていると云う訳でもないも
のな。

『メタルマンよ』
「・・・！」

ワイリー博士から通信が入った。

『状況は不利じゃ。撤退を許可する』
「了解・・・」

その言葉を聞いて俺はすぐ様にここから離れる。

「あ、待て！」

「こら、逃げんじゃねえ！！」

ロックマンの制止の声を振り切り、カットマンが怒りながら武器を投擲してくるが避けつつワープ装置のある場所まで俺は走り続けた。

「ちくしょー逃がしたか」

カットマンが悔しそうな声をあげてる。

「カットマン・・・」

「ようロツク。迷惑掛けちまったなあ・・・ごめんな」

カットマンが申し訳なさそうに過ってくる。

悪いのは君じゃないじゃないか。

それに危ない所を助けてくれた。

そのまま他愛の無い雑談を交わす。

緊急時と言う自覚はあるけど色々ありすぎた。

あの恐ろしい敵が気になったのもある。

「それにしても本当に危なかった・・・」

「あいつ何者なんだろうな？」

今になって考えるとあれは戦術を考えられた戦い方だった。

攻撃を避けさせて、逃げ場を潰して相手に注目させる事で最初の攻撃の考えをそらす・・・。

いつか、再び戦うのだろうか。

「そう言えばあのバスターを撃つたのは誰だったんだろう・・・？」

「こっちに来る時には見掛けなかったから解からないな」

カットマンも見えてないようだ。

一体、誰が助けてくれたんだろう？

「・・・あれがロックマンか」

構造物の影でサンガラスを掛けた男が赤いバスターを構え呟いていた。

第4面

大ダメージを負ったロックマンは一時帰還するようだ。

残ったカットマンが暴走中の作業用ロボットを倒していく。

これらがモニターに移る中で俺は修理を受けていた。
と言ってもあまりダメージは受けてないので直ぐに済む。

帰還した時、ワイリー博士に褒められた。

正直に言って意外だ。

任務をこなせなかったのでゲームと漫画のロックマンのノリで怒鳴られるかと思っていたが。

博士が言うには未完成の状態で圧倒して邪魔が入らなければそのまま捕獲出来た事を認めている。

まだ世界征服計画序盤だからまともな判断能力があるんだと考える。
ちなみに俺のロックマン漫画歴は池原しげと先生の1〜7までだ。

大まかな流れは予想通りだが細かな所で違いが出てると思う。

ワイリー博士はやたらと貫禄があるし、ライト博士が行動を起こしている辺りで。

「ほんとにどうなってるんだ・・・」

E缶を飲みながら呟く。

ちなみにE缶は結構美味しく感じる。

ロボットになってるから感覚が違うのだろうか？

ほんとにこの先が心配になって来た。

ワイリー博士は何か研究しているのかパソコンに向かって研究している。

ロクマンが一時撤退した事で余裕が出来たんだろう。

放っておいてコーヒーでも淹れてあげよう。

「むふふ・・・」

今のわしは久しぶりに上機嫌と言って良い。

わしの息子にして作品がライトの息子であり作品を上回った！

この事実が胸が躍る位に清々した。

じゃが・・・

「・・・（あの初めに邪魔に入ったロボット・・・“アレ”は）」

油断が出来ない。

間違いが無ければアレはわしとライトが共同研究していた時に作った最後の一機にして、今この世界で稼働している全てのロボットの原型。

「・・・油断は出来んな」

研究室に座りパソコンを弄る。

メタルマンの設計図を引つ張りだす。

いつか戦う時が来るかもしれん・・・。

現状で稼働しているワイリーナンバーズはメタルマンのみであり他は目覚めていない。

このライトナンバーズ暴走の第一手が失敗すればメタルマンを筆頭にワイリーナンバーズに踏ん張って貰わんといかん。

先の戦いの反省点はわかつとる。

多対一に弱く、装甲と外郭に欠陥の疑いあり。

いくら優秀でも囲まれれば終わりじゃ。

しかも、カットマンの武器であるローリングカッターを必死に避ける様を見て疑問に思い、コンピューターに計算させてみれば装甲と外郭にセラミカルチタン製の武器で攻撃されると容易く裂けてしまふようになっておる。

迂闊じゃった。

まさかこのわしが設計ミスをするとは・・・。

他のナンバーズにもあるじやろうか？

メタルマンは何で自身の弱点に気づけたのかが謎じゃがまあそこはわしの作ったロボットが優秀だったと言う事じゃ。

他にも何かあるかもしれんし、メタルマンは改造できる余地が大部分多い。

褒美としてメタルマンに何を強化するか聞こう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7313z/>

どうしてこうなった...(機械転生・習作)

2011年12月28日07時46分発行